

A NEW SUBSPECIES OF *YPTHIMA ARGUS* BUTLER FROM FORMOSA (LEPIDOPTERA, SATYRIDAE)

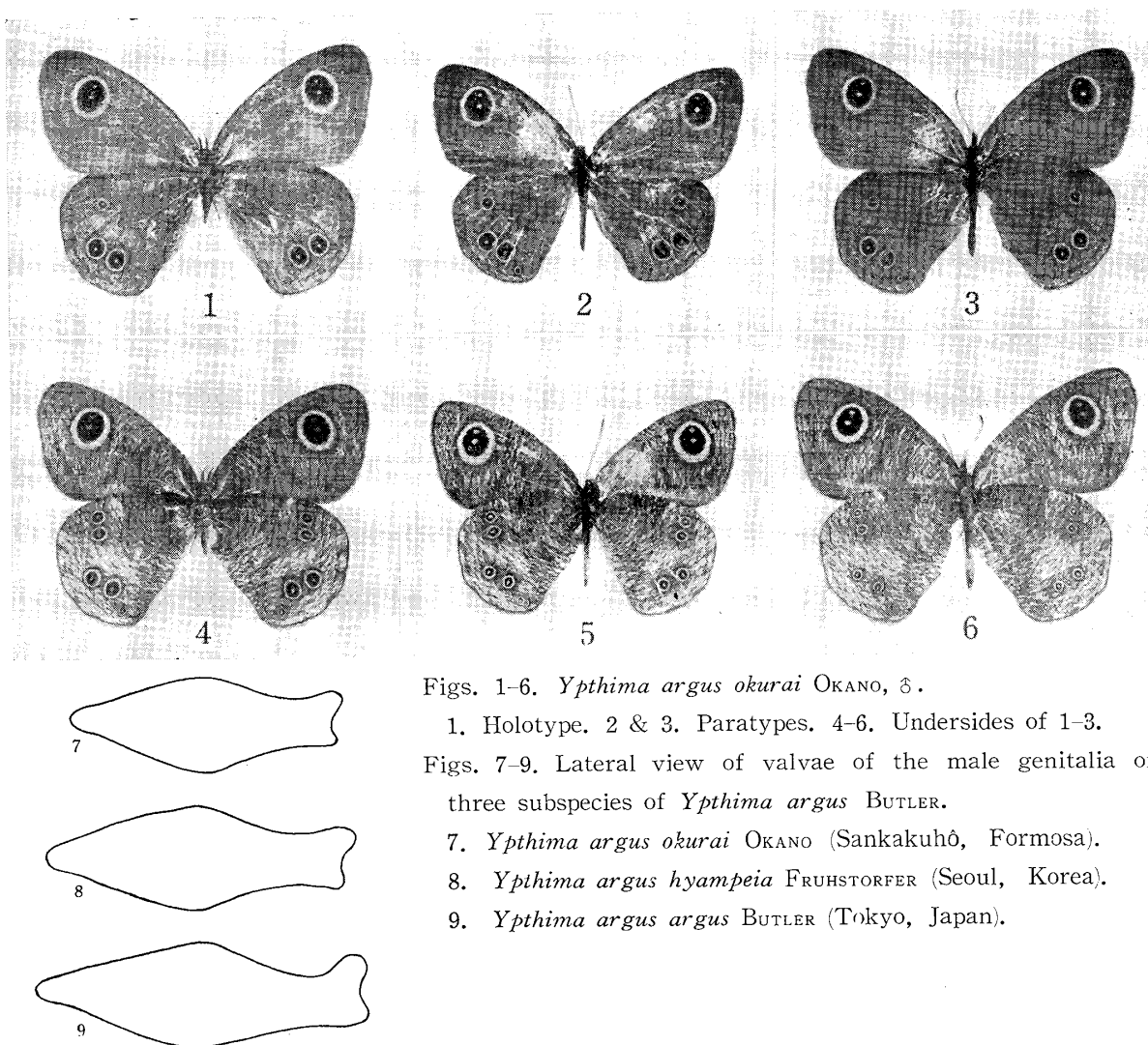
By MASAO OKANO¹⁾

Ypthima argus okurai subsp. nov.

Ypthima baldus zodina SHIRÔZU (part., nec FRUHSTORFER), Butterflies of Formosa in Colour : 125, pl. 33, figs. 241 & 242 ("winter brood", ♂), 1960.

A well marked subspecies occurs in Formosa.

♂. The subapical ocellus on both the sides of fore wing is slightly larger than in subsp. *argus* BUTLER and *hyampeia* FRUHSTORFER. On the upperside of hind wing, the ocellus in the space 5 is always well developed, and the lower terminal area is more or less irrorated with whitish scales. The underside of hind wing is almost the same as that of subsp. *hyampeia*, but the ocelli in the "winter brood" are much reduced in size.



Figs. 1-6. *Ypthima argus okurai* OKANO, ♂.

1. Holotype. 2 & 3. Paratypes. 4-6. Undersides of 1-3.

Figs. 7-9. Lateral view of valvae of the male genitalia of three subspecies of *Ypthima argus* BUTLER.

7. *Ypthima argus okurai* OKANO (Sankakuhô, Formosa).

8. *Ypthima argus hyampeia* FRUHSTORFER (Seoul, Korea).

9. *Ypthima argus argus* BUTLER (Tokyo, Japan).

1) 92 Nishishitadai, Ueda, Morioka.

In the shape of male genital valva, this new subspecies is more closely related to subsp. *hyampeia* than to subsp. *argus* as shown in the text-figures.

Length of fore wing : 19-21 mm.

Habitat : Formosa.

Holotype, ♂ : Sankakuhô (ca. 2370 m.), Central Formosa, 14. IV. 1954 in coll. M. OKANO.

Paratypes : 2 ♂♂, type-locality, 6. III. 1954, in coll. M. OKANO.

The subspecific name is dedicated to Mr. JÔZABURÔ ÔKURA, who kindly placed the specimens of this new subspecies at my disposal.

Note : the male genitalia of *Ypthima argus* BUTLER are similar to those of *Y. baldus* (FABRICIUS), but saccus much longer, valva without apical fold, and aedoeagus nearly straight.

摘要 : 台湾産ヒメウラナミジャノメを新亜種と認め、上記のように命名記載した。本文を書くに当り、貴重な標本を提供された大蔵丈三郎氏ならびに朴世旭氏に厚く御礼申上る。

再び信州産ミスジチョウの新種？について

磐瀬 太郎¹⁾

ソ連の昆虫学者 A. I. KURENTZOV 教授は、1957年発行のソ連科学アカデミー極東支部（ウラジボスク）の Komarovskie Chiteniya 誌第6巻に、“歴史的動物地理と種の形成”と題する論文を書いているが、その中でホシミスジ〜フタスジ群にふれ、極東ソ連平地産の *Neptis pryleri adetria* FRUHST. と、同じく山地産の *N. kuznetzovi* KURENTZ. と並べて、日本の平地産の *N. p. pryleri* と、山地産の *N. sp. n.* を図示（絵画）している。（本誌11巻43頁に転載してある）。

形態の記載はこの論文にはないが、*N. kuznetzovi* については同教授の別の著書“沿海州のチョウ”（1949、モスクワ）の中で、裏面を図示（写真）しており、特徴としては裏面後翅中央白帯を横切る翅脈は黒く明瞭であるが、いわゆるホシは4個きりなく、その中でも明かなのは1個のみであるとしている。

日本の *Neptis sp. n.* の出所について問合わせを出したところ、同教授から、このチョウは新種 *N. tamanuki* と命名した。それは玉貫光一氏から貰った2頭の標本によったもので、1頭は Honshu Prov. Shinano, July 15, 1932, Mt. Eboshi のラベルがあり、他の1頭には Honshu Prov. Naghano, Kodagasa-yama, Kochi-city, 1931 のラベルがあるが、この両地の標高や植物相を教えてほしい、との回答があった。

わたくしは早速玉貫氏に照会したところ、この標本は終戦時カラフトで仕事の引継ぎをした際に（磐瀬註、松虫2巻2号、1947、西尾美明「樺太から帰って」に詳しい）、手持ち標本を全部クレンツォフ教授に進呈して来たが、ラベルにある1931、1932頃には既にカラフトに赴任していたので、自分で内地で採集したものではない。エボシ岳のものは信州の飯島氏と交換したものの一部と思うが、四国のものは持っていなかった筈であるとのお答えを得た。

信州にもエボシ岳と称するものはいくつかあるが、この方は一応問題にしないとして、高知市のコダガサ山の方は、おそらく同市の好採集地小高坂山のことであろう。しかしこのラベルは混乱していて信用出来ない上に、小高坂山にホシミスジ、フタスジチョウらしいものはいない（げんせい6巻1/2号、1957、岡部正明・中村重久「四国南部の蝶」参照）。

また生態的にいって、エボシ岳と小高坂山では違いすぎる。

クレンツォフ教授は *N. kuznetzovi* をシホタ・アリン山脈の標高8~900mの針葉樹林中だけで採集しており、平地の *N. pryleri adetria* との間が隔離されたものと考えているが、たとえ *N. tamanuki* が2頭とも信州の高所でとれたとしても *N. kuznetzovi* と同じ意味のものではないと思う。原記載を入手していないこととて適確にはいえないが、独立の新種とは思えない。（23/VII, 1960 新虫報のために稿、19/X, 1961補筆）

1) 東京都文京区湯島新花町4